

## UNNキャンパス原稿書式

いわき市の可能性について

NPO法人うつくしまNPOネットワーク

監事 諸橋鑑一郎

▼1966（昭和41）年に14市町村（5市4町5村）が合併して、いわき市が誕生した。当時としては、日本一広い面積でした。（1,232km<sup>2</sup>）市街地が旧5市にあり多核分散型都市である。気候は海洋性気候で寒暖の差が少なく、日照時間が長い温暖な気象条件で、約60kmの海岸線を有し、山と海に囲まれた豊かな自然環境にも恵まれている。

▼明治以降の基幹産業は石炭産業で、双葉郡富岡町から茨城県日立市までの地域に存在し、本州最大で首都圏に最も近い「常磐炭田」の主要地域として栄え、日本の近代化に欠かせない地域であった。また、鉄道の常磐線も石炭を首都圏に運ぶ重要路線として早期に敷設され、日本の主要産業の地位を確立した。

▼高度成長期にはいると石炭から石油へのエネルギー革命が進み、基幹産業である石炭産業は急速に衰退し、石炭産業に代わる新産業を育成することが急務となった。1964（昭和39）年に「新産業都市建設促進法」によって地域開発、工業開発の対象として「常磐・郡山地区新産業都市」として指定を受け、その指定を有効かつ適切に遂行するため1966年に合併が行われた。

合併したいわき市は、工業団地や高速道路などの生産基盤の整備と工場誘致を積極的に行い、石炭産業から化学などの分野を中心とする製造業にシフトし、現在では、化学などの素材型産業と情報や輸送機器などの組み立て型産業がバランスよく展開され、2020年には製造品出荷額が3年ぶりに仙台市を抜き東北一に返り咲いている。また、炭鉱会社であった常磐炭礦（現・常磐興産）が会社の存続をかけて開業させたスパリゾートハワイアンズを筆頭にアクアマリンふくしま、いわき湯本温泉など観光都市への転換も図っている。

▼いわきの沖合は親潮と黒潮がぶつかる好漁場であり、水揚げされる魚は「常磐もの」と呼ばれている。しかし東日本大震災後の試験操業は2021年に終了し通常操業に移行したものの漁獲量は震災前の半分程度に留まっている。いわきで頑張る若者の一人は鮮魚店の4代目として活躍している。東京からUターンし「街をもっと多彩に、もっとおもしろく」の経営理念のもと新商品を次々と開発し「常磐ものの美味しい魚」を提供するため日々頑張っている。

▼多核分散都市であるいわき市は、それぞれの地域が工業、観光、商業、港湾、農林水産業などの個性と魅力を培っている。東日本大震災からの復興、人口減少、気候変動による自然災害の多発など解決しなければならない課題は数多くあるが、市全体としてこれらの個性と魅力を生かし、他の都市には見られない多様性を発揮していけば、新たな発展の可能性に繋がっていくと考える。

（2023年12月11日記）